

傅山聖母風秋萩帖

301
10

帙入



始



傳小野道風書
秋
萩
帖

釋文

全

30/10

傳小野道風筆 秋萩帖 解題並釋文

解題

秋萩帖は道風の筆として古くから世に尊重され、今は高松宮家の御所蔵になつてゐる。秋萩といふのは卷首に「秋萩の下葉色づく今よりぞひどきある人のいねがてにする古今和歌集卷第四秋上讀人不知とあるに依つて名付けたもので、實際は帖でなくて巻物である。

行成卿筆詩卷切と同一の箱入で表に「野跡和歌四十八首行字九段一
卷廿枚」是と並行して「權跡四韻詩四首絶句三首行字奥書一卷九枚」と書かれてあるもので、料紙は薄い鳥の子で白、茶、草、藍、黃、赤などの色紙である。歌の書いてある方は紙の裏で、表には淮南鴻列兵閑話題第二十が楷書で書いてある。この帖の和歌は何を書いたものか分らぬが、萬葉、古今、後撰などに入つてゐるものもある。文字に就いては古來獨

書、臨書、集字などの諸説があるが、概して運筆に生氣が乏しく、時に筆意の連續を缺き、補筆・加筆もあり、初めは運筆が遲澁で、漸次氣分を加へ、最後には生氣躍動し、殊に「計幾」「計幾」と同一文字を再び書き直してゐる所などから考へて臨書であると斷言して差支へなからう。惟ふに當時有名なるこの原本を得て臨書したものであらうが、この筆者も亦非凡なる技倆を具へてゐた人と思はれる。臨書は言ふまでもなく他人の書を真似て書き、全然自分の手を入れず、一意他人の手を摸し取るので、餘程技倆の進歩してゐるものでないと、手本と異つた字になり、或は甚しく不調和な字が出来、又は運筆の氣脈を失するとか、行の不揃ひを來したりするものであるが、この帖を通覽するに生氣に於いて多少の相違はあるが、始めから終りまで字型の整齊を缺いてゐる文字は殆どなく、而も集字ではあるまいかと疑問を起させるまでに字形の統一があり、終りに近づくに従つて愈々生氣を加へ、全く自己の書と疑はせ

る程のもので到底凡骨の企て及ぶべきものでない。文字は四字に連續してゐるものもあるが、傳佐理筆拾遺集賀歌と同じく、連綿のために前後の文字を特に變化させるといふことがないから、矢張り獨草體と見るべきであらう。この帖の原本は直接羲之の書の中から草假名とするに適當なるものを集字して來たものか、或ひはその集字したものと更に臨書したかの何れかではなからうかと思ふ。この帖の終りに王羲之の尺牘の臨書が九通あるが、其の中の文字「遠奴不可也有面數」を見れば、殆ど形態に於て運筆に於て秋萩帖の文字と同一である所から見ても、そう考へられるのである。當時は草假名文字を漸く用ひやうとする時であるが、未だ一定された文字がなかつたのでこれが工夫に意を用ひたことは言ふ迄もない。併し如何に必要に迫られたとはいへ、自分から文字を考へ出すことは容易なことではないから、自然現在行はれてゐる漢字の草書で草假名として適當なものをとることに

意知之呂久氣布東
 者^は 武^む 美^み 奈^な
 幾^{いく} 毛^の 當^あ 幾^{いく}
 能^の 能^の □^や 和^わ
 有^う 毛^の お 多^た
 陪^{はい} 布^ふ 知^ち 留^る
 能^の 也^や 都^と 閑^か
 都^と 登^の 羅^ら 里^り
 由^ゆ 乃^の 能^の
 □^な

以^い 東^{とう} 都^と 安^あ
 禩^ひ 理^り 久^く 幾^{いく}
 可^か 安^あ 以^い 破^は
 轉^{てん} 留^る 末^ま 起^き
 仁^{じん} 悲^ひ 餘^よ 乃^の
 數^{すう} 東^{とう} 理^り 之^し
 流^{りゅう} 乃^の 處^{ところ} 多^た
 悲^ひ 者^は
 以^い
 □^な

釋文

なるが、其れには當時最も尊重されてゐる義之の文字の中から撰び出
 さうと考へるのは蓋し當然の結果ではなからうか。このかうした考
 へによつて出來上つたものが即ち秋萩帖の原本と思はれるが、これは
 極めて貴重なものとされたことは勿論である。併し傳へ聞いて強ひ
 て借覽或は臨摹することを願つたものもあつたらうと考へるのは、今
 宮家に傳つてゐる秋萩帖は料紙も筆者も同一様に傳稱されてゐるが
 實際は左様ではない。卷頭一葉「安幾破起乃」だけは料紙の大きさが
 他の紙よりも縱が二分位長く、裏には淮南子が書いてない。文字は料
 紙が第二葉より大なるにも拘らず、却つて小さく書寫の巧拙は著く相
 違し、第一葉の文字は一見臨書とは思はれぬ程の出來ばえで、第二葉以
 下の生氣なきものとは甚しく異り、別手ではないかと疑を抱かしめる
 ものがある。惟ふに此卷頭一葉は筆者が時を異にして書寫したるもの
 の、断片か或は二葉以下に對する原本かとも考へられるものである。

利^ト我^ガ
鬪^ト幾^カ
面^ハ久^ク
之^シ良^カ
等^ト之^シ
堂^タ安^カ
末^カ羅^カ
能^カ禮^カ
之^シ不^ト

者^ハ雲^ク志^シ母^ト
爾^ニ美^カ毛^ト能^カ
難^カ陪^ヘ和^ト於^カ
久^ク乃^カ可^カ毛^ト
奈^カ堂^タ於^カ布^ト
理^ト都^カ幾^カ登^ト
毛^ト川^カ飛^ヒ
許^カ禮^カ東^ト
者^ハ利^ト

に 知^チ理^ト安^カ
闇^カ流^ル爾^ニ幾^カ
有^カ許^カ之^シ者^ハ
羅^カ東^カ和^ト轉^カ
見^カ能^カ禮^カ
武^カ者^ハ難^カ之^シ
遠^カ禮^カ毛^ト
那^カ者^ハ爾^カ
難^カ

爾^ニ和^ト牟^カ之^シ
所^セ可^カ之^シ毛^ト
弊^カや 遠^カ能^カ
天^テ東^カ見^カ布^ト
堂^タ闇^カ難^カる
に る 弊^カ餘^カ
奈^カ之^シ者^ハ
、 、

所^セ理^ト毛^ト闇^カ
布^ト能^カ耳^カ見^カ
禮^カ許^カ駕^カ難^カ
乃^カ美^カ川^カ
者^ハ難^カ幾^カ
布^ト悲^カ之^シ
利^ト能^カ久^ク
爾^カ母^ト禮^カ
堂^タ散^カ

母^ト難^カ毛^ト
利^ト都^カ安^カ
之^シ□ 留^カ
久^ク□ 閑^カ
禮^カ末^カ難^カ
ふ 散^カ我^カ
留^カ之^シ美^カ
女^カ久^ク奈^カ
理^カ

古^ニ 羅^カ 可^カ 者^ハ 能^フ 閑^カ ま^ス 之^レ 之^レ 駕^カ
東^ニ 之^レ 見^ム お^ハ 和^ハ 陪^ヘ 地^カ 閑^カ つ 羅^カ 勢^セ
乃^ノ 能^フ 難^カ 久^ク 我^カ 良^カ 閑^カ 弊^ハ 利^カ 奈^カ 遠^カ
者^ハ 布^フ 都^カ 東^ト 久^ク 之^レ 福^カ る 春^カ 美^カ 以^イ
左^リ 久^ク 幾^カ 母^カ 呂^カ 武^ハ 轉^カ 見^ム る 當^タ 堂^カ
弊^ハ 散^カ 和^カ 閑^カ 者^ハ 和^カ 遊^ハ 安^カ 閑^カ 見^ム
所^セ 登^カ 閑^カ 見^ム 堂^カ 禮^カ 末^カ ハ 於^カ
雲^カ 者^ハ 見^ム 耳^ニ 萬^カ 者^ハ 能^フ 良^カ 幾^カ
川^カ 安^カ 志^シ 牟^カ 所^カ 圓^カ
毛^カ

東^ニ 餘^カ 久^ク 堂^カ 氣^カ 東^ニ 能^フ 萬^カ 見^ム 氣^カ
利^ハ 悲^ヒ 斜^カ 我^カ 禮^カ 堂^カ 散^カ 都^カ 流^カ 留^カ
禰^カ 毛^カ ハ や 能^フ 武^ハ 能^フ 閑^カ や
牟^カ 邪^カ や 萬^カ 無^カ 計^カ 有^カ 耳^ニ 登^カ
者^ハ 幾^カ 能^フ 餘^カ 禮^カ 弊^カ と
堂^カ 餘^カ 之^レ こ^カ 者^ハ 耳^ニ 毛^カ
和^ハ 遠^カ 當^タ 所^セ 許^カ 之^レ 悲^ヒ
可^カ 許^カ 於^カ 牟^カ 毛^カ 東^ニ 保^カ や
比^カ

久く 知う 美み 可か
者は 之し 耳に 世せ
許す 久く お 難な
事し 東う 起き 久く
母も 川つ 者は
牟む 難な 以い
奈な 見み 散さ
之し 堂た 之し
ま弊

へる 川つ 勢せ 散さ
利り 能の 、 難な
見み 春す 雲う 難な
由ゆ る 美み 見み
安あ 布ふ 気け 以い
ま能の 者は 堂た
所そ 天て やま 加か
我わ

東う 以い
堂た 龍う
爾ル 舞う
母も 勢せ
勢奴ぬ 保う
堂た 禮う
幾う 川つ
川う 者や

呂 飛 耳 氣 留
安 わ 理 り 美 み 志 し
ま 悲 ひ 遊 ゆ 東 さ 毛 ら
能 の 都 づ 久 く 牟 む な い
閑 か 陪 へ る 宇 う
者 は 所 そ 毛 も 者 は 弊 へ
布 ふ 布 ふ 難 な ま 耳 に
由 ゆ 流 る 之 し 地 ち 安 あ
者 は 東 さ 東 さ 登 づ
所 そ ふ

所 そ 羅 ら 萬 も 之 し
都 づ 年 ん 能 の 久 く
遊 ゆ 登 と や 禮 れ
け 氣 け ま 布 ふ
幾 き 散 ち も る
け 者 は 理 り へ
き 所 そ 耳 に へ
轉 て 安 あ や
や 美 み や

裳^も 許^こ 波^は 難^な
や 保^ほ 可^か 見^み
登^の 理^り 利^り 堂^た
羅^ら 東^{ひがし} 能^の 者^は
春^{はる} 気^け ふ 美^み
波^は 地^ぢ 奈^な
我^わ 者^は 久^く
け 安^あ
禮^{れい}
登^と

要^も 東^{ひがし} 波^は 保^ほ
春^{はる} 毛^も 駕^か 理^り
東^{ひがし} 許^こ へ 轉^て
し 閑^{ひかわ} 見^み お
所^{ところ} 気^け 耳^は 幾^{うき}
へ 堂^た 許^こ 之^の
に 爾^る 保^ほ 移^い
け 見^み 禮^{れい} 氣^け
る

禮^{れい} る
流^る 毛^も
耳^は 所^{ところ}
於^お 東^{ひがし}
呂^ろ 加^か

由^ゆ 和^わ
幾^{いく} 可^か
爾^る に[、]
奈^な 見^み
利^り 能^の
奴^{やつ} 美^み
禮^{れい} 難^な
者^は 之^の
お 羅^ら
け

武^む 幾^{うき} 耳^は 雲^{くも}
多^た 遠^{とお} 起^{おき} 氣^け
毛^も 難^な 要^{もち} 母^め
登^の 東^{ひがし} 都^つ 安^あ
奴^{やつ} 閑^{ひかわ} へ 弊^へ
良^{らう} 堂^た 布^ふ 數^{すう}
之^の 能^の る 所^{ところ}
爾^る ま 遊^ゆ 羅^ら
遊^ゆ 乃^の 裳^も け
幾^{いく} や 安^あ 左^さ
所^{ところ} 萬^{まん} る 能^の
布^ふ 斜^{かた} 閑^{ひかわ} 安^あ
留^る 之^の 難^な 羅^ら
良^{らう} 久^く 安^あ 之^の
之^の 毛^も 之^の 散^{さん}
利^り 悲^ひ 牟^む
幾^{いく} 久^く

奈へ遊閑悲
我能へ閑
利者は禮利
氣難なるま
禮東由川
波幾要
意遠堂
布耳所
ふ

る我けし
閑へる羅
難流閑遊
毛へ幾
於濃能
意やや
耳萬へ
氣可ふ
へ利
流之

禮毛勢奴

利由見
爾幾餘
し布之
飛美能
東和
能氣
於轉
東以能
闢里し
安波遠
和爾安
由者氣
幾之天
所呂和
ふ當可
る弊美
爾禮東
利母閑
川見利
者東之
遊所氣
幾都者
能萬
所久散
羅お爾
爾和知

耳^レ末^ミ 悲^ヒ阿^ア和^ハ意^イ 理^リ見^ム幾^シ久^ク
能^ノ天^テ 美^ミ末^ミ可^カ久^ク 勢^ゼ末^ミ閑^カ毛^モ
布^フ者^ハ當^ダ乃^ノ美^ミ餘^ヨ 難^ナ久^ク氣^カ者^ハ
禮^ル無^ク流^ル我^ガ遠^キ之^シ 久^ク保^ハ雲^ク禮^ル
波^ハ許^ク々^ク留^ム難^ナ母^モ 耳^ヒ理^リ都^ツ天^テ
有^リ登^ト母^モ所^ニ安^カ 要^タ羅^ラ美^ミ
久^ク年^ハ耳^ヒ波^ハ羅^ラ 者^ハ牟^ツ都^ツ
當^ダ散^カお^ク閑^カ新^ハ 爾^ツ耳^ヒ
母^モ久^ク 許^ツ都^ツ

♪ 禮^レ那^ナ志^シ 當^ダ禮^レ登^ト毛^モ 東^ト難^ナ理^リ
安^カ者^ハ久^ク可^カ都^ツ奈^ナ末^ミ美^ミ 波^ハ保^ハぬ
難^ナ末^ミ可^カ理^リ 羅^ラゐ^ル地^カ 登^ト宇^カる
雲^ク都^ツ許^ツ東^ト 牟^ツふ^ト和^ハ者^ハ ♪ 幾^シ布^フ
餘^ヨ難^ナ登^ト轉^テ 可^カ當^ダ能^カ 面^カ久^ク遊^ク
乃^ノ氣^カ新^ハ處^カ 久^ク川^カ難^ナ ぬ^カ左^カ散^カ
那^ナ駕^カ安^カ無^ク 難^ナ美^ミ閑^カ 能^カへ
閑^カ留^ム 可^カ 美^ミ波^ハ禮^レ 安^カや
禮^レ

雲^う 安^あ 者^は
久^く 久^く 難^な
散^ざ 末^ま 能^の
羅^ら 轉^て 意^い
末^ま 弊^へ 呂^ろ
之^じ 末^ま 乃^の
難^な 新^し 美^み
爾^る 可^か 留^る
波^ば 面^め

川^か 之^じ 女^め 遊^う
禮^れ 閑^か 天^て 面^め
波^ば 羅^ら 和^わ 能^の
牟^む 可^か 可^か
安^あ 留^る 氣^け
可^か 東^{ひが} 乃^の
春^{はる} 毛^も 可^か
見^み 故^ご 悲^ひ
悲^ひ 度^ど

奴^ぬ 許^こ 數^す 美^み
非^ひ 乃^の 面^め 餘^よ
者^は 末^ま 者^は 之^じ
那^な 當^た 保^ほ 乃^の
之^じ 地^ぢ 登^と 々^々
久^く 度^ど 也^や
幾^う 幾^う 末^ま
難^な 數^す 弊^へ
閑^か 閑^か 留^る

毛^も 波^ば 者^は 意^い
能^の 於^お 那^な 登^と
遠^{とお} 可^か 以^い 波^ば
安^あ 留^る 氣^け
可^か 東^{ひが} 乃^の
春^{はる} 毛^も 可^か
見^み 故^ご 悲^ひ
悲^ひ 度^ど

無^む 禮^れ 能^の 王^わ
新^し 者^は 也^や 閑^か
乃^の 美^み 布^ふ 也^や
之^じ 呂^ろ 當^た
登^と 可^か 毛^も
於^お 布^ふ 地^ぢ
母^も 留^る 理^り
悲^ひ 都^つ 奴^ぬ
之^じ 遊^う 留^る

幾^う 母^も
志^し 春^は
都^つ 々^々
流^る 呂^ろ
閑^か 耳^じ
奈^な 裳^も 羅^ら 幾^う
那^な 勢^ぜ
久^く

幾^シ數^カ可^ハ不^フ
王^ハ波^ハ者^ハ留^ル
堂^タ夜^ヤ也^ヤ散^カ
留^ミ志^シ保^ハ登^ト
羅^ハ散^カ登^ト々[・]
牟^ク悲^ヒ度^ト奈^ナ
之^シ幾^シ理^リ
登^ト爾^ニ
難^シ新^シ

久^ク夜^ヤ波^ハ雲^カ
阿^ハ徒^シ々[・]久^ク
禮^レ乃^ノ也^ヤ悲^ヒ
志^シ散^カ久^ク春^カ
東^ト悲^ヒ有^フ耳^ヒ
幾^シ新^シ都^ツ堂^タ
餘^シ悲^ヒ之^シ能^フ
里^リ之^シ天^テ美^ハ
幾^シ

爾^ニ也^ヤ川^ツ
志^シ登^ト美^ハ
母^モ耳^ヒ氣^カ
乃^ノ者^ハ無^カ
遠^カ々[・]之^シ
也^ヤ能^フ
久^ク不^フ
於^カ久^ク
比^カ散^カ

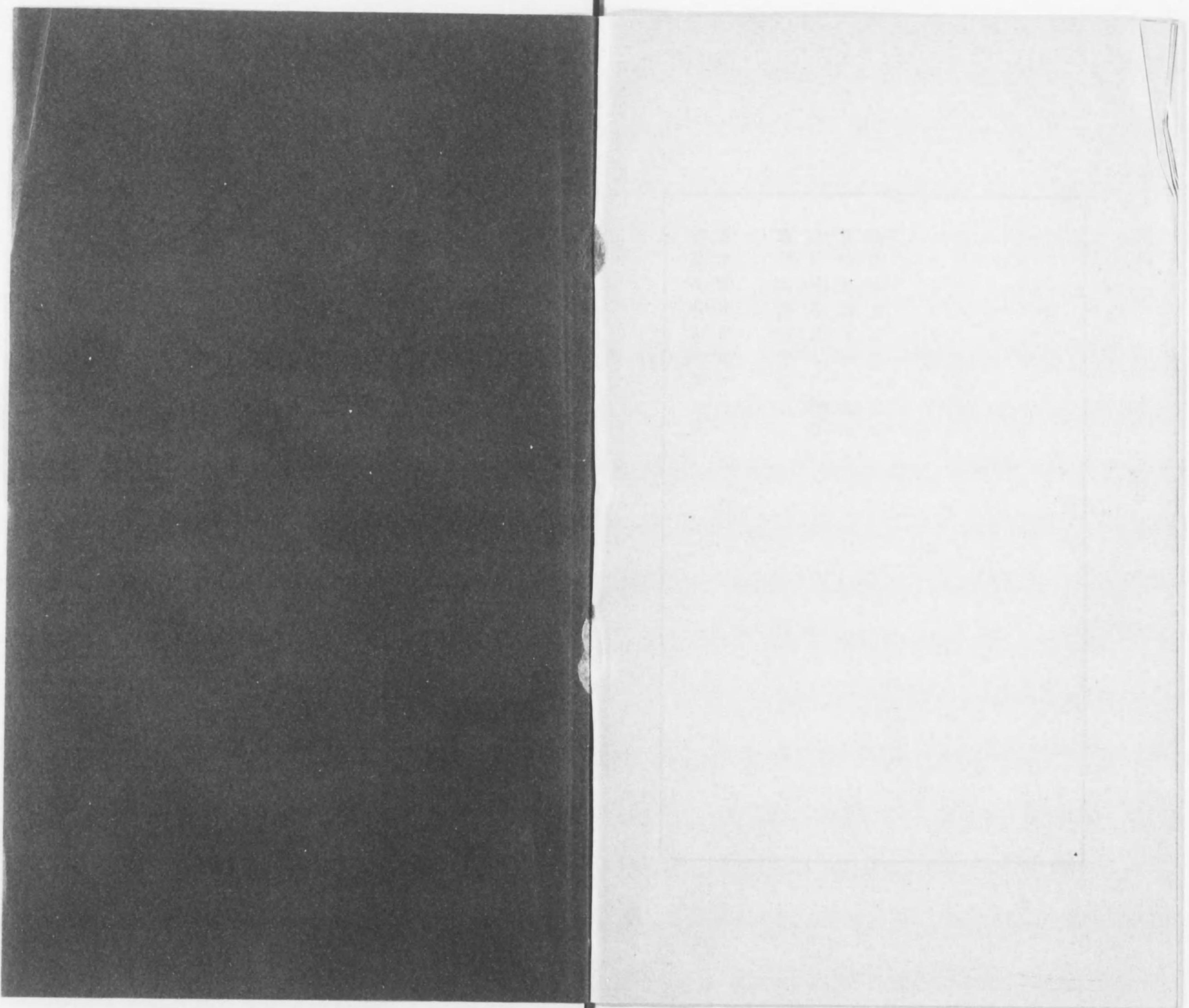
安^ア春^チ幾^シ川^ツ爾^ニ
羅^ハ久^ク耳^ヒ呂^ハ保^ハ
當^タ禮^レ毛^モ布^フ不^フ
未^カ奈^ナ美^ハ者^ハ可^カ
能^の者^ハ無^カ難^ナ登^ト
東^ト難^ナ所^を美^ハ
之^シ安^ア許^コ禮^レ
也^ヤ加^カ波^ハ者^ハ
留^ミ散^カ美^ハ安^ア
當^タ禮^レ毛^モ布^フ不^フ
東^ト々[・]數^カ
奈^ナ美^ハ者^ハ可^カ
者^ハ無^カ難^ナ登^ト
難^ナ所^を美^ハ
許^コ禮^レ者^ハ見^ム閑^カ
波^ハ者^ハ川^ツ有^カ
留^ミ散^カ美^ハ安^ア
當^タ禮^レ毛^モ布^フ不^フ
東^ト々[・]數^カ
奈^ナ美^ハ者^ハ可^カ
也^ヤ幾^シ之^シ
者^ハ無^カ難^ナ登^ト
難^ナ所^を美^ハ
所^を天^テ
美^ハ和^ハ
見^ム閑^カ
都^ツ留^ル
末^カ々[・]
那^な

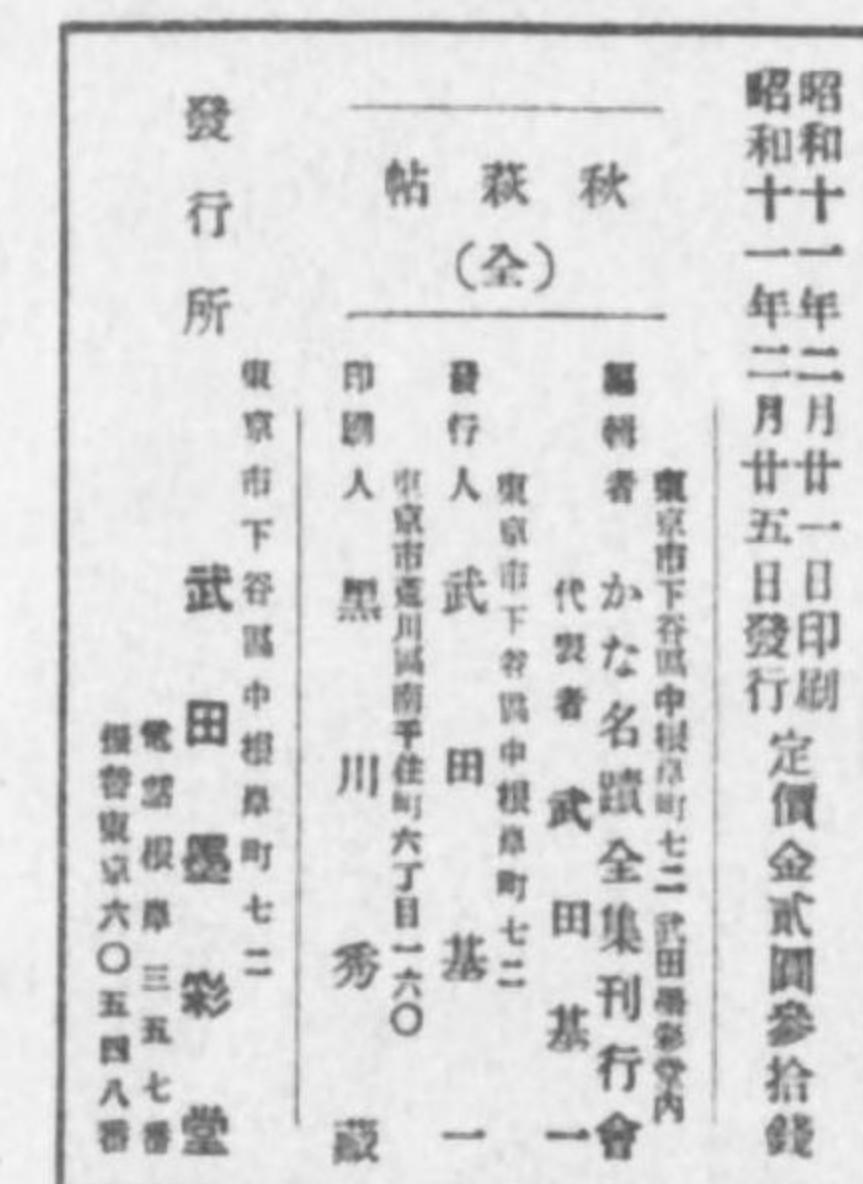
末^タ 登^ト 和^ハ 夜^ヤ
多^タ 和^ハ 氣^ハ 弊^ヘ
難^ナ 堂^タ 川^フ 武^フ
久^ク 流^ル 留^ル 久^ク
耳^ヒ 布^フ 安^ア 羅^ラ
年^ハ 末^タ 堂^タ
母^ハ 乃^ハ 禮^レ
和^ハ 可^カ 可^カ
可^カ 者^ハ

者^ハ 遠^カ
那^ナ 計^ハ
乃^ハ 布^フ
事^シ 能^ハ
川^フ 美^ハ
面^カ 閑^カ
耳^ヒ

幾^シ 於^シ 繫^ヒ 許^ヒ 堂^タ 與^ス
閑^カ 毛^ヒ 散^ハ ハ、 那^ナ 能^ハ
報^ヒ 悲^ヒ 堂^タ 呂^ロ 美^ハ 奈^ナ
母^ヒ 耳^ヒ 面^カ 有^ハ 散^ハ 可^カ
都^ツ 者^ハ 努^ハ 幾^シ 和^ハ 耳^ヒ
久^ク 閑^カ 久^ク 氣^ハ 阿^ハ
登^ト 堂^タ 散^ハ 者^ハ 羅^ラ
意^シ 難^ナ 餘^ス 也^ハ 武^フ
不^ハ 留^ル 我^カ

徒^ト 雲^カ 當^ハ 難^ナ
能^ハ 幾^シ 羅^ラ 保^ス
堂^タ 餘^ス 之^シ 志^ス
面^カ 無^ハ 報^ヒ 天^テ
許^ヒ 春^ハ 登^ト 者^ハ
處^セ 末^タ 々^ハ 難^ナ
布^フ 幾^シ 幾^シ
悲^ヒ 春^ハ 母^ハ
和^ハ





乃等改めに之を承る

事外理焉

祖廟所當奉行

一存一處

至之終有天下

わちを

主事あや

其事あら

立ち之久未かず

玉龍ちるをた

龍

あら

久松、弓也

事教へ

玉龍、弓也久松
事教へ

立

久

未

か

ず

と

も

よ

う

正月社

えまむらの神もくわうめ

御子の神也ア新卒之

新卒也ア事あまく

おとこは事あまく

あ半身不思議事あまく

理系ア新卒新卒元

ちちほす地も土木

三生堂肩元を

母おまかせを東本

萬葉抄

雪乃事多也洋

老翁難久矣誰

多幸久しく——其原林

ちの間で、かくもまく
氣をもせぬ事は东北

ア流(アリ)

弟者(アツシマ)アリ
沙敷(サフ)もけ社(サカニ)は年(ヒサシ)
事(モノ)あつた事(モノ)アリ

弟者(アツシマ)

かまくらの
事はあつた
とてはいふ
がまくらの
事はあつた
とてはいふ

丁巳年夏月
王之春書

あわせの年
おとこ

予之
也者，
其一也。

おもひだり
おもひだり
おもひだり
おもひだり
おもひだり
おもひだり
おもひだり
おもひだり
おもひだり

之
一
種
也
是
一
事
也

猿々入子布久人有少主

吉宗乃志七事山川

多事事未了

之ノ社事也、や、

美也也、主事雖不、あ

所幸少心、事、お、志、少、

丁、事、極、け、半、け、

志士也。不苟同。乃有心焉。

壬午年九月某日花甲年

桂林人信五齋之集

和其詩一首

壬午九月某日申酉年

唐詩草。許子秋先生

此詩作于壬午年四月

東京の事務所

致親戸口の事也あつ

傍丸をもと申す

川あまくはおまよ沙汰

多見ゆ

さうなればおまよも

もあらひ親戸口

ちし久東も年をす
久元年子
けよ此あはせ
老あり不難あ
乃や美利ラシタマハ
梅原と小布さく

さうす、ゆあ事あ少産

了りあせりあてに

まきふ龍東一毛主

まくもくねら

めう、アヒミ龍

ゆまく、たよみぬ社元おけ

ろく、かく、小北東五九

社名法

御連島おきい 納屋

支那、乃今は御社

東毛は主事吉田貢
あま毛、しるにけ方

新アキアシガラム、
清毛北ふ、伊集院村
は原、東毛は毛計

老や心の事も

あらうへまえ、まめ

アリ、少くわざく、お

多き、極きよし、

お川

緒事お年元あれ年、

まゐるを いわまつれ

波打つて さくらの

あゆゆきふる

尼崎の やまと

雲霞の おもひ

あそび おもひ

村山行政

うねねきよせ
けりすとく
ひきぬれあまく
ゑふ
うめあまく
すとく
むじゆきよせ
けりすとく
ひきぬれあまく
ゑふ

三月十九日

至主社由久義
君有布被
前原山主家入
寺古堂御歎

毛木地主九種
紫玉子和也川
之水門人

皆事あるれんりゆくは久
社在山の久能庄子
菊池源平年
吉之理本精文書
松久有子は柳橋あ
社え事れ難い事か有
くちに言ふ事乃松木
多毛志社て美志山有

まくらの家をすむは雍年

凡そ夕べは理あたる所
理勢難い了

三ヶ月後、ノル安彦翁
物語を新しくあつて
に事乃ちあめりが

山本鈴之

吉之子元
廿年正月廿九

社也久

毋事、
廿九

年

初十

事事也
廿九

也布东行
向雅榜

社莫不至
礼之莫不於
莫不乃之莫不

まほろばの地も地盤ぬる

老爺の白の布をめぐらす

はおうづく紫のあゆみ

きれき

まゆう（乃）や事無る

か面老休忙多年氣

は乃あれ地久年久難不

ぬ地老れづく

都御門の素乃二忍の後
かくすれども有る
之二忍幻半身の事見
少社は

未だ其がひに乃主翁面
あり事内裏、書約二段
立候、故臣事うへ難

併地在之良也

吾士人之士也一有能將
天苟之年年之方也教事
教萬事也一言萬事不美

萬事

爾孫少之不善於事
以故布告不祥丁酉歲
未午子未未世難事加

まうりこもくまき難事か
まうれ社をまわ

馬鹿幸あれ お前や
いり美、幸あれ あれふくね
やまうり お、 や
る生れ身乃幸

雪天幸あれ お幸あれ
まうれ久木幸あれ お幸あれ

君様乃お此約也人
久に社主事奉ひま

當有之奉理尔約
主也以之為未

五波内事放此之以莊

半玉主之而往之

莊未去之年元和

かの種とつゝわらひにままで、
やまとみゆき年事、あわゆる
情けむき面の年事

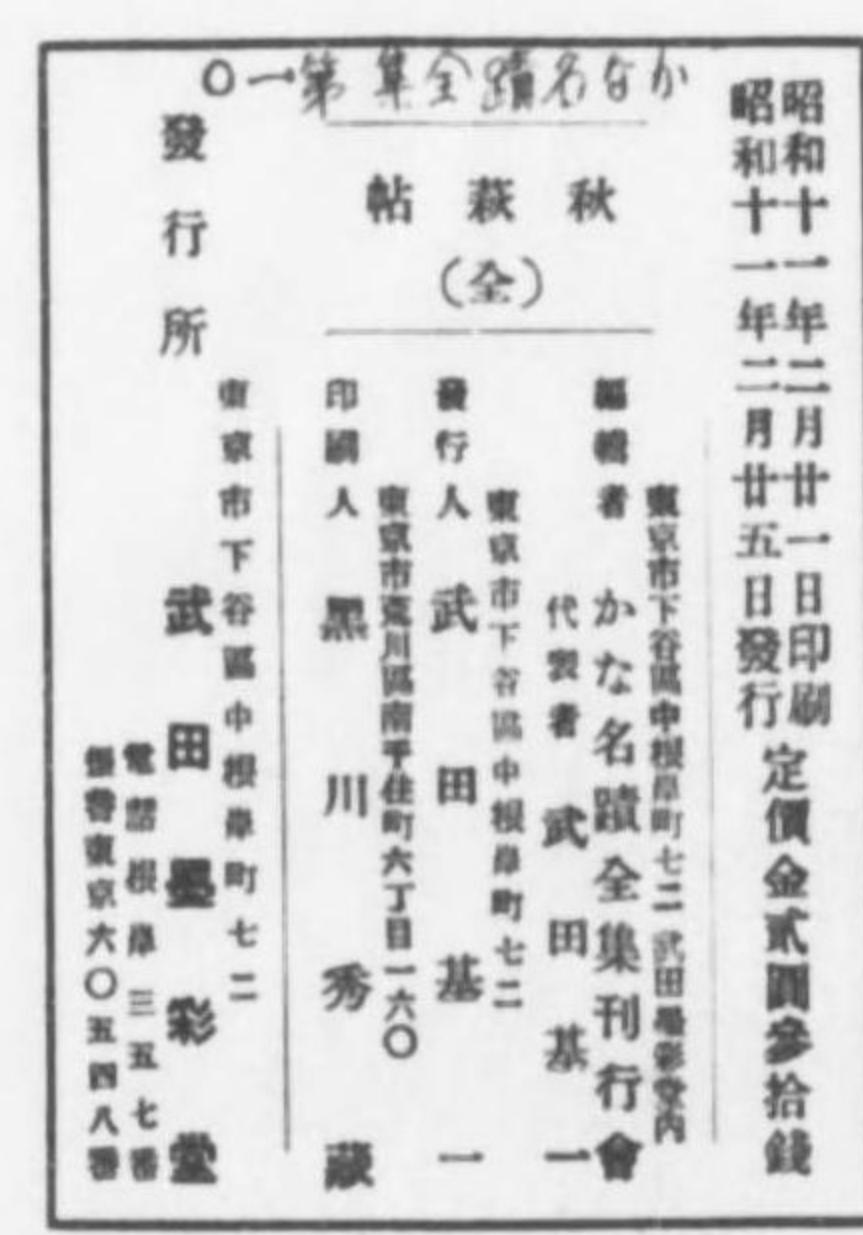
5月未だうづくまに宿毛まふ
さよ船、ねむれ事すれど
ゆふぬくせ、くわねむれ事
車、おまく西の方

於は之ア毛毛玉事多社
半事大和母事久也之
吉け帝也其事半事
克松乃事山面

右事、毛久、推事社
和事、山事事方、
毛事、帝事事方、
毛事、帝事事方、
毛事、帝事事方、

毛事、帝事事方、

301
10



終

